

『感性を働かせている子どもに寄り添い、想像力を豊かに発揮できる』授業

青色と黄色を混ぜてできた緑色。「苦そうなまっ茶だ」と色を見て味を感じる子どももいれば、「きらきら輝くエメラルドみたい」と色を透かして見ることで、光を感じる子どももいます。子どもによって見方・感じ方・捉え方は多様です。

図画工作科の授業では、そうした子どもの感性を大切にしながら、造形的な創造活動を通して豊かな情操を養うことを目的としています。

自分自身や仲間同士で没頭してつくりだしたり、感じ取ったりする活動を計画的に仕掛け、つくりだす喜びを味わい、感性を働かせている子どもへの支援をしていきましょう。

ポイント 1

子ども一人一人が持っている感性を大切にする

- 作品には、筆の運び方、色の重ね方、形の表し方等に子どもの思いや願いが表出します。したがって、教師が子ども一人一人に寄り添い、子どもがどのような見方・感じ方等をしているか、子どもの思いや願いがどのように表現されているのかを的確に捉えることが大切です。
- 子どもと対話することで、子どもが持っている見方・感じ方等をより確かに捉えることができます。対話によって気付いたことを基に、〔共通事項〕の視点から子どもの見方・感じ方等を捉えることが適切な指導や支援につながります。
- 教師がデジタルカメラ等のICT機器を活用して子どもの姿を捉えることにより、表現のプロセスを把握しやすくなり、子どもが発揮している「発想や構想の能力」や「創造的な技能」を具体的に捉えることができます。

ポイント 2

子ども自身が表したいことを心の中に思い描けるような支援を心掛ける

- 子どもの思いや願いをその子らしく発揮できるように、一人一人の興味・関心や発達の段階に応じた支援を心掛けることが大切です。しかし、教師の思いが強すぎて、「教師が願う作品」をつくらせている場合があります。子どもが感じたこと、表現したい主題を受け止めた上でその子どもに必要な支援をするように心掛けましょう。
- 図工室にある様々な素材や画用紙等を、いつでも子どもが使えるように工夫して配置したり、素材別に分かりやすくまとめておいたりして、子どもが表現したい主題を持って取り組めるような環境を工夫することも大切です。

ポイント 3

系統的な題材構想により、豊かに感じたり、表現したりする力を身に付ける

- 子どもが進んで形や色、材料などに働き掛けながら、描いたりつくりだしたりする「造形遊び」を各学年や学校全体で意図的・計画的に位置付けることで、表現や鑑賞をより充実させることができます。
- 題材を構想する際、「鑑賞—造形遊び—表現—鑑賞」というように、題材のつながりや活動内容を工夫することが大切です。また、1時間の授業においては、豊かに感じたり、表現したりする力を身に付けるため、「習得から活用」だけでなく、「活用しながら習得」というように各学校で柔軟に取り組む必要があります。

実践事例(小学校1年生)

題材名 いろのマジック (A表現(1)造形遊び) (1/2時)

本時の目標 色と色を混ぜたら、混ぜてできる色ははじめの色と変わるだろうと思っている子どもたちが、赤、青、黄の3色の色水と水を基に色水を混ぜ、偶然にできる色を見つけたり、自分のイメージに合う色を作ったりすることで、色水作りを楽しもうとする。

指導過程

つ	・予想される子どもの表れ ○さあ、これからどうなるでしょう (教師が黄の色水に、青の色水を注ぎ、混ぜる様子を見せる)	・あっ、色が変わっていく! ・知ってる!青色と黄色を混ぜると緑色になるんだよ。	巾を準備し、デジタルカメラを活用し、子どもの活動を記録する。 *ペットボトルには、赤、青、黄の色水と水を入れておく。
か	○赤、青、黄色の色水と、水を使って、色のマジックになるよう!	・おもしろそう、早くやってみよう。 ・上手くできるかな	
か	見通す ・赤と青を混ぜたら紫ができたよ。 ・ぼくも緑色を作ってみよう。 ・全部の色を混ぜてみよう。 ・赤に水を入れるとピンクになるのかな。 ○色を混ぜると色が変わるね。たくさん色水を作ってみよう。	・どうすればいいかな? ・どれを混ぜようかな? ○好きな色水を2つ選んで混ぜてごらん。色が変わっておもしろいよ。	【大事なこと】 ①ペットボトルから色水を注ぐときには、ロートを使って、少しずつ色水を入れること。 ②色水作りに失敗したと思っても、捨てずにとっておくこと。 ③こぼしたときは、雑巾でふくこと。 ④走らない(滑ったり転んだりすると危ない)
か	かかわり合う ・見てみて、オレンジジュースができたよ。 ・毒薬ができた。 ・できた色水と色水を混ぜてみよう。 ○どうやったら、その色ができたの?他のジュースも作ってみて。	・色水を並べてめいろをつくったよ。 ・お花の形に並べたよ。 ・いろんな図、実験室みたい。 ・色水タワーをつくったよ。 ○おもしろいね。これからどうなっていくのかな。ならべつむ	・窓辺に置くと、色が透けてきれいだな。 ○置く場所を変えると、色が違って見える。透かす ◎自分のイメージを大事にしなが、工夫して作っている。(創造的な技能) ※どうしたらいいか悩んでしまう口さんや口さんに、具体的に赤と青、黄と青など色の変化が分かりやすい色水作りをするよう指示し
ま	○どんたが合ったかな? の色味を作って面白かった。		

デジタルカメラを活用することで、子どもの活動の様子を記録として残しておけます。また、子どもと一緒に画面を見ることで、表現のプロセスを価値付けることもできます。

〔共通事項〕アの色や形(緑色、色を混ぜると色が変わる等)や、〔共通事項〕イのイメージ(オレンジジュース、めいろ等)を価値付けていくことが大切です。〔共通事項〕が、子ども同士のコミュニケーションを活性化させることにつながります。

授業者は、造形遊びの「いろのマジック」で身に付けた力を、絵の具に液体粘土を混ぜ、どろどろの絵の具を手につけて描く題材につなげています。「表現」「鑑賞」をより充実させようと、題材のつながりが意識されています。

前の題材

造形遊びとのつながりを考えた題材の例

【造形遊び】いろのマジック

混ぜる色の組み合わせで色が変わることや、混ぜる水の量によって色が変わること気付く

【鑑賞】

容器に入れた色水を並べたり、積んだりすることで、色の重なりや見え方の面白さに気付く

【表現】

どろどろ絵の具へんてこ島

色に対する面白さを思い出しなが、どろどろの絵の具の感触を楽しんで表現する

次の題材

『子ども同士が主体的に感性を高め合う』授業

屏風を鑑賞する授業で感じたことを発表する場面において、「紅と白が並べられたことで、めでたさや対比を感じる」「川の模様から左右の屏風のつながりを感じる」「日本美術の道具は、生活や自分自身を豊かにしている」など、子どもが関わり合っていくことで、自分自身では思いつかなかった新たな価値に気付いたり、周りの意見や感想をまとめ、新たな価値を創り出したりする姿が見られます。

美術科の授業では、図画工作科で培った感性や表現及び鑑賞の基礎的な能力を基に、豊かな情操を養うことを目的としています。

上記で示した鑑賞活動のように、子ども同士が主体的に感性を高め合うことができるような支援をしていきましょう。

ポイント 1

生活の中の美術の働きを意識できるように支援する

○美術科の授業では、人の生活や文化に果たす役割について気付く学習活動を意図的に仕掛けながら、生涯にわたり主体的に関わっていく態度を育むことが大切です。

○美術作品だけでなく、自然や身の回りの環境、事物も含め、幅広く鑑賞の対象と捉える必要があります。さらには、表現と鑑賞を相互に関連させながら、形や色彩、材料等から、それらの性質や感情、イメージといった〔共通事項〕を基に豊かに感じ取ったり、表現したりできるような支援が必要です。

ポイント 2

子ども一人一人が持っている感性を大切にする

○作品には、自己の体験や経験が、色の重ね方、形の表し方等に表出します。したがって、子どもの思いや願いがどのように表現されているのか、子どもが持っている見方・感じ方等を教師がしっかりと捉える必要があります。

○子どもが「何を感じ、何を考えてこのような表現をしたのだろう」と、子どもの思いに寄り添うことが大切です。子どもの振り返りの記述や感想には、感性や技能等、支援のヒントが表れています。それを基にどのような支援が適切なのか考えていきましょう。

○鑑賞活動では、説明や批評し合うといった言語活動を充実させましょう。他者の考えを聞くことで考えが整理されたり、自分になかった視点や考えを持ったりすることにつながります。また、〔共通事項〕の視点から鑑賞し合うことで、自分の中に新たな価値を見出すことにつながります。

ポイント 3

子ども自身も美術文化の担い手であることを意識させる

○美術活動を特定の人によるものと考えず、文化として大切にすることを育てましょう。自分の生き方との関わりで美術を捉え、鑑賞を深めることが大切です。

○生活の中の美術は、今ある美術文化を継承することに加え、自分たちで創造していくものでもあることを伝えていく必要があります。よさや美しさを自分の中で大事な価値とし、それらにあこがれる心を育てていきましょう。

実践事例(中学校1年生)

題材名 「発見！日本の美～着物のデザイン～」(1/12時)

本時の目標
 ・「紅白梅図屏風」のレプリカを間近で鑑賞し、屏風の役割を理解しその美しさを味わうことを通して、日本美術について興味・関心をもつ。(美術への意欲・関心・態度)
 ・屏風の左隻に描かれた梅の枝振りを想像した直後に実寸のレプリカを鑑賞し、「紅白梅図屏風」の構図の工夫について味わうことができる。(鑑賞の能力)

指導過程

過程	形時	学習活動	*支援・留意点 ◎評価
つかむ	全体 5分	日本の美を探ろう ○ 左隻には白い梅の木があります。どんな枝振りの木なのか予想して描いてみよう。	*右隻と左隻を別々にコピーして用意しておく。 *右隻のみ描いてあるワークシートを用意して、生徒が描き込めるようにしておく。
	個人 5分	・ 右隻の枝とちょうど対称的な形じゃないかな。 ・ 右隻が大きくて左隻の木は小さくて遠くにある感じ。	*個人の表現のよさを認めつつ、なぜそう描いたのか、対話をしながら把握する。 *教室の背面のスペースに紅白梅図屏風のレプリカを立て
深める	全体 10分	○ それでは左隻を見てみよう。 ・ 左隻の枝は、すごく大きくてはみ出している。 ・ すごい！大きい。本物？	
	個人 10分	この屏風には、どんな美の秘密があるのだろう。 ○ この屏風を近くで鑑賞したり、離れて全体を鑑賞したりして、ワークシートに自分が感じたことを書こう。	
まとめる	全体 15分	・ 背景の金色がとてもきれいで、豪華な感じ。 ・ 紅と白がおめでたい感じ。赤と白が対比になる。 ・ 左隻の枝は、すごく大きくてはみ出している。 ・ 梅が咲いているから季節は春かな？でも蕾のほうが多いな。 ・ 川の模様がとても気になる。続いている感じがする。	
	個人 5分	○ 屏風の色や形・イメージについて感想を書こう。 ・ 尾形光琳の描いた紅白梅図屏風はとてもきれいだった。特に赤と白の対比が金色の背景にすごく映えていた。もっと日本美術の作品を見てみたい。 ・ これまで、日本美術には興味はなかったけれど、日本人の知恵ってすごいと思った。色々な作品を鑑賞してみたい。	しさを味わうことを通して、もっと知りたいという思いをもっているか。(関心・意欲・態度)

自分の考えをワークシートに書く時間を十分確保するとともに、対話により子どもの思いを把握しようと努めています。学級全体で意見を共有することにより、一人では気付かなかった視点で鑑賞を深めることができます。

「赤と白の対比」「川の模様が続いている感じ」等、〔共通事項〕の視点で鑑賞することを、授業者は意識しています。

日本美術を自分の生活に置き換えて関わろうとする意欲や態度が高まった姿を価値付けようとしています。

前の題材

題材構想

- 第1時■ 国宝「紅白梅図屏風」を鑑賞しよう。どんな美しさを発見できるだろうか。
- 第2時■ 代表的な日本の作品を鑑賞して、日本美術の造形的な特徴を考えよう。
- 第3時■ 日本の代表的な造形要素である「模様」を鑑賞し、よさや美しさを見つけよう。
- 第4・5時■ 着物のデザインを考えて、日本の美しさを伝えよう。(アイデアスケッチ)
- 第6・7時■ 着物の型の画用紙に下書きしよう。
- 第8～11時■ 日本のよさや美しさが伝わるような色を考えて、着彩しよう。
- 第12時■ お互いの作品を鑑賞し、よさを話し合おう。日本のよさはどこにあるだろうか。

次の題材